

# 311メモリアル演劇公演

## 報告書



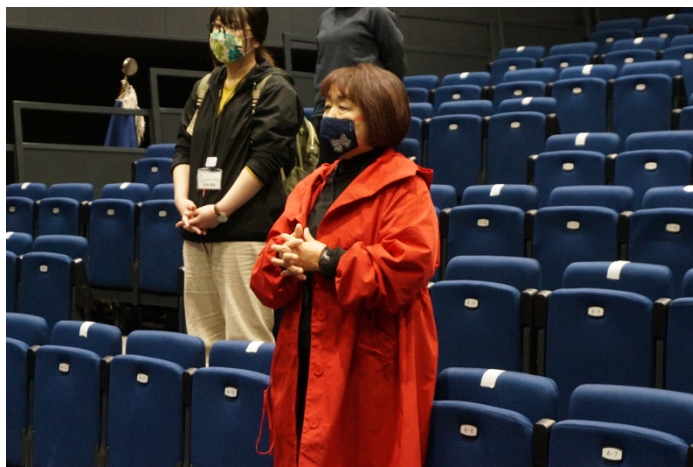
20210624

## 311メモリアル演劇公演

朗読劇「生きている 生きてゆく ～ビッグパレットふくしま避難所記より～」を脚色・演出されたのは、「富岡町3・11を語る会」の代表、青木淑子さん。（青木淑さんは、もと富岡高校の校長先生で、周囲から「青木先生」と慕われている方です。以下、青木先生）。脚本は、同名の記録本がもとになっています。



リハーサル風景



「富岡町3・11を語る会」の代表、青木淑子さん（青木先生）

公演本番のちょうど10年前の3月16日、東京電力福島第一原発事故直後に郡山市のビッグパレットふくしま避難所に富岡町と川内村の住民が避難しました。このときの避難者のつづやきが書き留められた記録本が、

「生きている 生きてゆく ビッグパレットふくしま避難所記」です。この本から青木先生が言葉を拾い上げ、脚本にされました。出演者は、富岡町民やふたば未来学園高生ら約20人。

実際にビッグパレットふくしまで避難生活を送った人も出演しており、「避難者のつづやきを、出演した町民らが思いを込めて読み上げると、客席からはすすりなく声が漏れた」と翌日の福島民報は伝えています。現地に行ったくごしごし福島>メンバーの大谷先生からは、観劇直後に「フィナーレしました。泣きっぱなしでした」という臨場感あふれるLINEが私たちに届きました。



公演が行われた「ふたば未来学園」



リハーサル風景

# 311メモリアル演劇公演・練習風景



## 311メモリアル演劇公演

朗読劇は、冒頭、M9.0の巨大地震発生を伝える言葉から始まり、最大高13mの津波、福島第一原発で起きた水素爆発、拡大する避難指示、混乱する当時の状況について語られました。その後、郡山ビックパレットふくしまに集団避難した人々のつづやきを中心に劇は進行し、出演者の背後には様々な写真がスクリーンに映し出されていきました。



「家に帰りたいわね。富岡、いいところなのよ。」

・・・もう住めないかもね。

「姪がくれたマグカップどうなったかしら？」

「戦争よりも放射能の方がひどい。」

「すべてを失った。菜っ葉も椎茸もダメになった。」

「犬を家に置いてきたんだ。」

「3日で帰れると思ったのにね。顔は笑ってるけど」

心では泣いているんだよ。

「こんな辛いめはもう私達でこりごりだよ。」

「ホント！『諦めない』って大事だと思うよ。」

「若い人は可能性しかないわ。」

「仮設住宅も抽選でまだ入れない。」

「人生すべて一からで、これからが一番大切だから。」

「ありがとうね。」

「足湯、本当によかったよ。」

朗読劇「生きている 生きてゆく ～ビッグパレット避難所記より～」から抜粋



## 311メモリアル演劇公演

富岡町民のみなさんやふたば未来学園高生らによるつづやきと、リアルな写真の数々。いまここで語られていることが現実にあったことなのだと思えて理解するのではなく、心に飛び込んでくる、感情を揺さぶられる舞台でした。

「体験者が口から発する、表現する力の大きさ、強さ。それを取りまとめ、演出して表現に落とし込んでいることに感服、そして作品に感動しました。」

これは、<ごしごし福島>のメンバーの一人、桑山朋子さんの感想です。



上演後の青木先生の言葉もとても印象的でした。

「私たち、生きていますよね。この脚本を書くというか、その本の中から、あの日の富岡の人、川内の人言葉を拾い上げていく中ですごくつらいことが書かれていても不思議なくらい気持ちがあたたかくなりました。

不思議なくらいなんかすごく強いものを 自分の中に感じました。10年という月日をいろいろに今言われますけど、10年という時間は決してまとまるものではなくて、これからに続くっていう、その時間だと思います。」



観客席のみなさんと記念撮影

## 311メモリアル演劇公演

この朗読劇を観ることができて本当によかったと感じています。同時に、一人でも多くの人に観てもらえたらと思いました。



集合写真



公演当日の受付の様子

「生きている 生きてゆく ～ビッグパレットふくしま避難所記より～」の記録本とDVDは、購入も可能です。

ご希望の方は、こちらまでお問合せください。

富岡町3.11を語る会 事務所 電話・FAX：0240-23-5431 / メール：kataribe\_office@tomioka311.com